

窓付きが異世界から来るそうですよ？

Shoggoth

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゆめにつきに嵌ったので執筆してみた。独自解釈を多分に含みます。筆者は文才が皆無です。それでもよければどうぞ。

目次

1.	醉生夢死 (すいせいむし)	1
2.	胡蝶の夢 (こちょうのゆめ)	9
3.	泡沫夢幻 (ほうまつむげん)	13
4.	夙夜夢寐 (しゆくやむび)	16
5.	夢賚之良 (むらいのりよう)	22

1. 酔生夢死（すいせいむし）

そこは、小さな部屋だった。

人間の生皮を剥いで繋ぎ併せたような、妙に生々しい凶案の絨毯。やけに古めかしいブラウン管のT.V。

部屋の大きさと比較するとやけに多い座布団。

埃が降り積もっていて、本の題名も判読できないが、それでも綺麗に本が配置された書架。

取り調べ室にあるような簡素な机。

そして真っ白な、まだ誰も使っていないかのような、柔らかそうなベッド。

そして——部屋の奥にある地味な意匠の扉。

その様な、不気味な雰囲気の小部屋に、窓付きはいた。

「——何で、また此処に来れたの？」

そこは、紛れも無く、夢の世界だった。

しばし戸惑った後、窓付きは部屋の奥にある扉を開ける。

そこには12個の奇妙な意匠の扉がポツン、と置いてあった。

そして窓付きは確信めいた何かを持ってもう一度小部屋へ戻る。

そこには——

「やあ、久しぶりだね窓付き」

「——先生？」

目の前に立つ、不可思議な人型。

それは細かい造作が余りにも適当な男性のようだった。

昆虫の複眼みたいに硬質的な目が二つあるだけで、口も鼻も耳も存在しない顔に、のつぺりとした髪の毛らしきもの。体も単色の黒で軟体動物のような光沢があった。

それは、窓付き達が『先生』と呼ぶ、夢の中の人物だった。

★ ★ ★ ★ ★

「どうして、私はまたこの、夢の世界に来れたんですか？」

この部屋、いや、この世界は窓付きの未成熟な精神によって形作られた場所だ。

現実ではもう大人となり、お婆ちゃんになり、孫も出来た。そんな窓付きがこの世界に来てしまうことは無い筈なのだ。

「窓付き、自分の身体からだをよく見て欲しい」

窓付きは自らの身体を見て、また驚く。

すっかり老いてしまっていた筈のその身体は、若返って——否、この夢を見ていた頃の自分の身体に戻っている。

「窓付き、君は——既に死んだんだよ」

「えっ!？」

しかし——有り得ない話では無かった。

「自覚していた筈だろうか？君の身体はすっかり衰弱していた。そしてそのまま、君は死んでしまったんだよ」

「……………」

予想していた、予知していた、自分の死期が近づいていた事も。

「ここからが本題だ。君の、君達がへエフェクトと呼んでいるモノは、未だ君の中に残っている」

「だから、君は異世界への招待状を受け取れるようになってしまった」

エフェクト——私は念じてみる、『★かき★』と。

すると、私の手元には赤い傘が、最初から持っていたかのように、手に収まっていた。

私が傘を広げると——雨が降るから傘をさす、そんな事象を逆転したかのように——雨が降りだす。

エフェクトが存在する事を確認すると、傘をしまう。それと同時にまた、雨が止む。

「そして、これは窓付きの、子供達からの贈り物だよ」

先生がそう言って渡したのは沢山の——数えると大体90個位だった——色とりどりのイースターエッグの様な、卵型の物体。

「君の子も、君と似たような夢の世界を持っていたんだ。だから私も干渉できた。そして、君が異世界に行くかも知れないことを伝えると

——皆、自身のエフェクトを窓付きに渡すと言ったんだよ」

「……………そっか」

私も察していた、私の子、孫に、夢の世界があつたことを。

「これが異世界行きの招待状だ。読めば異世界へ行ける。この手紙をどうするかは君が決めたらしいよ」

私は先生が持っていた90個くらいのエフェクトを全て受け取り、手紙も受け取る。

「——じゃあ、いってらっしゃい」

手紙を開けて、私は先生に言う。

「いってきます」

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、

世界の全てを捨て、

我らの”箱庭”に來られたし』

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

「わっ」

「きゃー！」

窓付きはすぐに気づいた。

急転直下、自分たちは上空4000mほどの位置に投げ出されたのだと。

眼前に見える断崖絶壁。

縮尺を見間違うほど巨大な天幕に覆われた未知の都市。

彼らの前に広がる世界は——完全無欠に異世界だった。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

窓付きはすぐに念じる——『★まじよ★』と、

自分の姿が変化したのを確認するや否や、落ちていた二人の女性——猫もいたのでそれも一緒に——を掴み、ゆつくりと降りていく。

一人だけ、一人の少年だけは助けられなかったが窓付きの腕は二つしかないので仕方無い。

窓付きは湖の近くにあった岸へゆつくりと着陸する。

「あ、ありがと……」

「…助かった」

「に、やああああ…」

「えっと、どういたしまして」

自分の若々しく戻った声に違和感を感じながらも、感謝の意を受け取る。

「おい、なんで俺も助けなかったんだ？」

湖から岸へ上がった少年がやや威圧的に尋ねる。

「私の腕は二本しか無い、それに箒にこんなに沢山人を乗せるのは初めてだから保険も兼ねて」

私が淡々と答えると舌打ちして少年はそっぽ向く。

ボーイツシユな方の少女が辺りを見回して呟く。

「此処……どこだろう？」

「さあ。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

恐らくこの少年が言っているのは古代インドでの宇宙観を指しているのだろう。世界は巨大な亀の甲羅こうらに支えられた3頭の象が半球状の大地を支えていると考えられていたという説である。一度は聞いたことのある人も多いだろう。

適当に服を絞り終えた少年は軽く曲がつたくせっぱねの髪の毛を搔きあげ、

「まず間違まちがいないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正して。——私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、その猫を抱きかかえている貴女あなたは？」

「……春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。次に私たちを助けてくれた親切な魔法の貴女は？」

「言われて気づいたが、今は『★まじよ★』の状態のままである。『★まじよ★』を解除して自己紹介する。

「私は窓付き」

「あら、魔女じゃなかったのね。少し残念だね。最後に、野蛮で凶暴
ほうな貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻
十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子揃った駄目人間なの
で、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

窓付きは周りを見渡して、気づく。草陰に、人影が見える事に。

チラリ、と十六夜の方を見ると目で『今はまだ気付かないフリしと
け』と言わんばかりに見ていた。

窓付きは今は気付かないフリすることにした。

★ ★ ★ ★ ★

十六夜が苛立たしげに言う。

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だ
と、招待状に書かれていた箱庭とかいうとの説明をする人間が現れ
るもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……………。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけ
ど」

全くだ、と窓付きは思った。とはいえ、窓付きも余り人のことをど
うこう言える立場ではないが。

ふと十六夜がため息交じりに呟く。

「——仕方がねえな。こうなったら、そこに隠れている奴にでも話
を聞くか？」

四人の視線が人影に集まる。

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの猫を抱いてる奴と三
つ編みの奴も気づいていたんだろ」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「気配には敏感な方だから」

「……………へえ？面白いなお前ら」

軽薄(けいはく)そうに笑う十六夜の目は笑っていない。窓付き以外の三人は理不尽(りふじん)な招集(しょうしゅう)を受けた腹いせに殺氣(ころ)の籠(こ)もった冷ややかな視線(しせん)を人影(にんげい)に向ける。人影(にんげい)がやや怯(おそ)んだ気配(きはい)がした。

「や、やだなあ御三人様(ごさんにんさま)。そんな狼(おおかみ)みたい(こわ)に怖い顔(こゝろ)で見られると黒ウサギは死んじやいますよ? ええ、ええ、古来(こらい)より孤独(こどく)と狼(おおかみ)はウサギの天敵(てんてき)でございます。そんな黒ウサギの脆弱(ぜいじやく)な心臓(しんぞう)に免(めん)じてここは一つ穩便(おんべん)に御話(ごわ)を聞いていただけたら嬉しい(うれ)でございますヨ?」

「断(つ)る」

「却下(きやつか)」

「お断(つ)ります」

「そんなこと言(い)ってる時点で大分脆弱(ぜいじやく)な心臓(しんぞう)はしてない気がする」

「あつは、取りつくシマもないですね♪」

バンザイ、と降参(かみまが)のポーズをとる(たぶん)黒ウサギ。

窓付きは黒ウサギの眼(め)が冷静(れいじやう)に自分(じぶん)たちを値踏(ぢふみ)みしていることに気づ(き)いた。

そして、春日部耀(かすがい)は不思議(ふしぎ)そうに黒ウサギの隣(となり)に立ち、黒いウサ耳(みみ)を根(ね)っここから驚掴(おどつか)み、

「えい」

「フギヤー!」

力(ちから)いっぱい引(ひ)つ張(は)った。

「ちよ、ちよつとお待(まち)ちを! 触(さわ)るまでなら黙(だま)って受け入(い)れますが、まさか初対面(はつたいめん)で遠慮(えんりよ)無用(むよう)に黒ウサギの素敵(すてき)耳(みみ)を引き抜(ぬ)きに掛(か)かるとは、どういう了見(りやうけん)ですか!?!」

「好奇心(こうきしん)の為(な)せる業(わざ)」

「自由(じゆう)にも程(ほど)があります!」

「へえ? このウサ耳(みみ)って本物(ほんぶつ)なのか?」

今度は十六夜(じゅうろくや)が右(みぎ)から掴(つか)んで引(ひ)つ張(は)る。

「…………。じゃあ私(わたし)も」

「ちよ、ちよつと待(まち)——!」

今度は飛鳥(とび)が左(ひだり)から。左右(ひだりみぎ)に力(ちから)いっぱい引(ひ)つ張(は)られた黒ウサギは、声(こゑ)にならない悲鳴(ひな)を上げ、窓付き(まどつき)はその様子(ようす)を微笑(ほほえ)ましく見(み)ていた。



「——あ、あり得ない。あり得ないのでですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしますとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないデス」

「いいからさっさと進めろ」

窓付きは黒ウサギと十六夜達の戯れたわむが終わるまでに子供達から貰ったエフエクトを整理していた。

「それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ？言いますよ？さあ、言います！」

——黒ウサギの説明を大体省略——

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニケーションでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」

「待てよ。まだ俺が質問してないだろ」

静聴していた十六夜が威圧的な声を上げて立つ。ずっと刻まれていた軽薄な笑顔が無くなっていることに気づいた黒ウサギは、構えるように聞き返した。

「……………どう言った質問ですか？ルールですか？ゲームそのものですか？」

「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かってルールを問いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのは…………… たった一つ、手紙に書いてあったことだけだ」

「この世界は……………面白いか？」

「——」

飛鳥と耀も無言になって返事を待つ。

彼らと呼んだ手紙にはこう書かれていた。

『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』と。

それに見合うだけの催し物があるのかどうかこそ、三人にとって一番重要な事だった。

「——YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

2. 胡蝶の夢（こちようのゆめ）

黒ウサギに連れられコミュニケーションに向かったのは二人と一匹だけだった。

そして、残る二人——逆廻十六夜と窓付き——は、世界の果てを見に行くために別行動を取っていた。

その二人は、いや窓付きは現在——

「ごめんなさい……………」

——十六夜と蛇神を叱しかっていた。

時は遡さかのぼる——

★ ★ ★ ★ ★

——逆廻十六夜は窓付きを手に持ちながら、凄まじい速度で走っていた。

「よしっ、到着だぜ！」

轟音どっおんを立てて着陸する。目の前には大河が流れているのを確認して満足そうに頷うなずくと、十六夜は窓付きを手放した。

「くべっ」

「おい、窓付き大丈夫か？女性として出しちゃいけないような声出ちゃってるぞ」

「い、十六夜の、せい、でしょ……………」

強烈なGを受けたせいで弱りきって、声を出すのも精一杯な体で窓付きは反論する。

「悪かったな。でも、お前こつて異世界こに投げ出された時は結構平気そうにしていたよな？あの時も相当苦しかったかと思ったが……………」

「その、時は、『エフェクト』を使ってたから、まだ、大丈夫だった、それに、今回は、その時より、苦しかった……………」

『エフェクト』、ねえ…………お前が変身したアレのことか？」

「スー、ハー…………。大体合ってる。正確にいうならアレ——『★まじよ★』は、『エフェクト』の一つ」

「ふーん、そうか……………」

興味ありげに、いや事実興味があるのだろう。十六夜は窓付きをま

じまじと観察する。

「よし、窓付き。他の『エフエクト』見せ——『む？我の領域に何か来たと思つたら脆弱な羽虫共じゃったか』——あ？」

声のした方を向くと、白くて長いモノ——身の丈三〇尺強はある巨軀の大蛇が聳え立っていた。

「オイオイ、窓付きよ。どういう訳だか知らないが蛇如きが人間サマを馬鹿にしているぞ？どういう事だろうなあ？」

窓付きの『エフエクト』を見ようとすると邪魔されて不機嫌になつた十六夜が相手を馬鹿にする。

『ほう？只の羽虫かと思えば、どうやら力の差も判らない、阿呆な蛆虫だつたようだな？』

一瞬の静寂、そして——

『あ、あ、？』

睨み合う一人と一匹。

「ヤハハ、力の差の判つてない大蛇（笑）が何馬鹿な事を言つてんだ？捻り潰すぞ？」

『我を誰じやと思つてその大口を叩いているのかは知らんが、我は水神の眷属の蛇神じやぞ？空を飛べる羽虫にも劣る、地を這うしか能の無い蛆虫如きが何故我を捻り潰すなど世迷いごとを言えるのじやろうなあ？』

「オイオイ、余り強がるんじやねえよ。弱く見えるだろ？」

『蛆虫程度の節穴では我の余りの強靱さに現実逃避したくなるのも仕方ないのう』

これまた一瞬の静寂。

『上等だ（じや）、表へ出ろ』

既に表に出ている事に気付かない程に気が立っている一人と一匹。だからこそ、気付かなかつた——

「——ねえ」

『何だ（じや）！邪魔する………』

「ちよつと、そこに正座しようか」

——『チエーンソー』を手に持ち、返り血を浴びている窓付きの

放っている、その強烈な怒気に。一人と一匹にはその言葉に逆らうという選択肢は与えられてなかった。

★ ★ ★ ★ ★
「全く……十六夜に至っては非力な女の子を僻地へ連れていった拳句放置して、異形のモノに襲われた時は流石に死ぬかと思つたよ？」

「いや、お前の何処が非力——」
「なにか？」

「——いや、ナンデモナイデス」

「それに白雪にしても出会って間もない人を行き成り馬鹿にして、而もそのまま怒りに身を任せて喧嘩を吹っ掛けるなんて……」

「……出会って間もない蛇神に脅迫するのは——」
「問題でも？」

「い、いやー！何も問題無いのじゃー！」
「宜しい」

浴びた返り血を洗い終えると窓付きは十六夜と蛇神——聞くと、白雪と言うらしい——に説教をし終えると、手頃な岩に腰掛ける。「小僧！何なのじゃ、先程のモノは!?彼奴の持っていた道具からは破壊そのものを固めたかのような力を感じたぞ?!」

「俺にはアレがチエーンソーを模した強力なチカラだということと、恐らく窓付きの持つ『エフエクト』という奴だという事しかわからなかった。一体何者なんだ、窓付き……」

「……(この身体になって、少し短絡的になったかな……やつぱり体が子供だと性格も体に引つ張られるのかな?)」

「やつと見つけましたよお馬鹿さまああ……つて、何なのデスカ、この空気は」

思案顔の岩に腰掛けた窓付きと、顔を寄せて小声で何かを話している蛇神と十六夜。その光景に黒ウサギは目を白黒させた。

漸くして、黒ウサギが落ち着くと尋問を始めた。

「兎も角……一体何が合ったのですか？」

「蛇神が喧嘩を吹っ掛けた。後、窓付きが激怒した」

「小僧が喧嘩を吹っ掛けた。そして窓付き怖い」

「十六夜に引つ張られて辺境へ、そのまま十六夜と白雪が口喧嘩する。その間に私が異形のモノに襲われて、私が二人に説教をした」

「成程、さっぱり意味がわからないのデス……」

口々に言葉を重ねる三人に対して半ば呆れたかのような声を出す。

「言ってる事はわかるのデスが、理解できません。何故窓付きさんは蛇神サマに説教なんて出来たのデスカ？」

「ん？私はその時偶々返り血を浴びていて、武器を持っていたからかな？」

「偶々で返り血なんて浴びるものなのデスカ!？」

「驚愕の表情を『態と』顔に浮かべて思案する黒ウサギ。

「(どういう事デス？返り血を浴びて平然とするその精神、とてもじゃないかもしれませんがまともな人格をしているとは思えません。しかし、狂人という雰囲気纏っている訳では無い……)」

「あ、そっか。『チェーンソー』は『殺傷系エフェクト』だから白雪も恐れただ」

窓付きは、『殺傷系エフェクト』で倒せないモノを沢山知っている。しかし、それは夢の中だからだ。そのエフェクトが現実になったとき、強力過ぎる程に強力な道具となって現れることになる。窓付きはそこまで認識できていなかったのだ。

「オイ、今窓付き、殺傷『系』って言ったよな？もしかして、複数個あるチェーンソーみたいなものがあるのか？」

恐る恐る尋ねる十六夜。それに対して窓付きは「うーん、と」と考える仕草をしたあと、

「だから……合計6種類、かな？」

「マジかよ……」

「まあ、その内5個は私の娘のエフェクトなんだけどね」

「二お前(窓付きさんは)(お主は)娘がいるのか(デスカ)!？」

なんとなしに言ったその言葉は、爆弾だった。

3. 泡沫夢幻（ほうまつむげん）

皆が揃ってから説明する、と窓付きが言い、十六夜が黒ウサギ達のコミュニティの状況を推理して、黒ウサギが説明し終わると、三人はコミュニティに向かう事にした。そして走っている十六夜はその横にぴったりくっついて来ている窓付きに問いかける。

「——で、それもお前の『エフエクト』なのか？」

「これも私の娘の物だけだね……私の移動用エフエクトだと疲れるし、この『☆バイク☆』が最適だと思った」

そう、窓付きは現在、バイク用のヘルメットを被りバイクに乗っていた。黒ウサギはその横を走りながら感心したように呟いた。

「窓付きさんは沢山のギフトを持っていらつしやるんですね……」

「この『エフエクト』はあくまで付属品に過ぎないけどね。私——いや、私達の本質は別の物だよ」

「それは凄い興味深いな」

十六夜が目を細めて愉たのしそうに口を歪ませる。窓付きはそれを見て少しばかり顔を顰しかめさせ、告げる。

「私は面倒事は嫌いな方なんだけけどね……」

「ヤハハ、別にいいじゃねえかよ」

「私としてもコミュニティ内での争いは辞めてほしいのですが……」

★ ★ ★ ★ ★

日の暮れた頃に噴水広場で十六夜たちと飛鳥たちは合流をして、飛鳥たちの話を聞いた黒ウサギは案の定ウサ耳を逆立てて怒っていた。「な、なんであの短時間に”フォレス・ガロ”のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!?!」「しかもゲームの日取りは明日!?!」「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!」「準備をしている時間もお金ありません!」「一体どういう心算つもりがあつてのことです!」「聞いているのですか三人とも!!」

「ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています」

「黙らつしやい!!」

口裏を合わせたかのように息ピッタリな三人の言葉に激怒する黒ウサギ。それを笑って見ていた十六夜が止めに入る。

「別にいいじゃねえか。見境なくえらんで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ」

「い、十六夜さんは面白ければいいと思ってるかもしれないけど、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ？この“ギアスロール契約書類”を見てください」

「参加者が勝利した場合、主催者は参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニティを解散する”——まあ、確かに自己満足だ。時間をかければ立証できるものを、わざわざ取り逃がすリスクを背負ってまで短縮させるんだからな」

ちなみに飛鳥たちのチップは“罪を黙認する”というものらしい。「でも時間さえかければ、彼らの罪は必ず暴かれます。だって肝心の子供達は……その、」

「そう。人質は既にこの世にいないわ。その点を責め立てれば必ず証拠は出るでしょう。だけどそれには少々時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのにそんな時間をかけたくないの」

「それにね、黒ウサギ。私は道徳云々よりも、あの外道が私の活動範囲内で野放しにされることも許せないの。ここで逃がせば、いつかまた狙ってくるに決まってるもの」

「ま、まあ………逃がせば厄介かもしれないですけど」

「僕もガルドを逃がしたくないと思ってる。彼のような悪人は野放しにしちゃいけない」

飛鳥の言葉にジンも同調する姿勢を見せ、黒ウサギは諦めたように頷いた。

「はあく……。仕方がない人達です。まあいいデス。腹立たしいのは黒ウサギも同じですし。」フォレス・ガロ”程度なら十六夜さんが一人いれば楽勝でしょう」

黒ウサギのその言葉に十六夜と飛鳥は怪訝な顔をして、「何言ってるんだよ。俺は参加しねえよ？」

「当たり前よ。貴方あなたなんて参加させないわ」

「フン、と鼻を鳴らす二人。黒ウサギは慌てて二人に食ってかかる。「だ、駄目ですよ、御二人はコミュニケーションの仲間なんでふからちやんと協力しないと」

「そういうことじゃねえよ黒ウサギ」

十六夜が真剣な顔で黒ウサギを右手で制する。

「いいか？この喧嘩は、コイツらが売った。そしてヤツらが買った。なのに俺が手を出すのは無粋だって言ってるんだよ」

「あら、分かっているじゃない」

「…………。ああもう、好きにしてください」

そこで窓付きが手を挙げて飛鳥に問う。

「私も駄目なの？」

「当然よ。救^{たす}けて貰^{もら}った借りがある分、尚^な更^お参加^せられるのは困るわ」

「そっか」

飛鳥は自分に借りを作りたくない———そう言う事なのだろうと窓付きはアタリをつけた。

「さて、窓付き。お前に子供がいるということについて、説明して貰おうか……………」

「へえ？それは中々興味深い話ね……………」

「大人しく説明した方が身の為……………」

飛鳥と耀は十六夜の言葉に少しばかり目を見開いた後、捕食者の眼で窓付きに近づいてくる。そこに黒ウサギが慌てた様に割り込んで来て三人に告げた。

「す、すいませんがこれから皆さんのギフトの鑑定に行きたいのですヨ。なのでその話は後にしてくれると助かります……………」

それを聞いて三人は苛立ちを隠し切れない———いや、十六夜は堂々と舌打ちをしていた為、隠す気も無いのだろうが———様子を見せた。それを見た窓付きは内心助かったとホッとするのであった。

4. 夙夜夢寐（しゆくやむび）

暫く雑談を交えて歩くと、蒼い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記された旗が見える。あれが”サウザンドアイズ”の旗なのだろう。日が暮れて看板を下げるけ割烹着の女性店員にわ黒ウサギは滑り込みでストップを、

「まっ」

「待った無しですお客様。うちは時間外営業はやってません」

……………ストップをかける事も出来なかった。

窓付きは口喧嘩のように言い合い出した店員と黒ウサギ達を見て、考える。あの店員は黒ウサギだと分かった上で締め出した。——否、黒ウサギだと分かったからこそ締め出したのだろう。そして、黒ウサギの現状を考えて——結論を出した。

「黒ウサギ、日を改める——いや、帰ろう」

「ま、窓付きさん!?!」

「店員さん、”サウザンドアイズ”は『”ノーネーム”お断り』なんですよね?」

「——ええ、そうですね」

窓付きの言葉に店員は肯定する。それを予想できたからこそ、此処で引くのが最善ではなくとも善いのだ。

「……………では、失礼しま」

「いいいやほおほおほおほお! 久しぶりだ黒ウサギイイイイ!」

店内から飛び出してくる少女が突如、黒ウサギにタックルを仕掛けてきた。そのまま黒ウサギは少女と共に空中四回転半ひねりして街道の向こうにあった浅い水路まで吹き飛んだ。

「きゃあ————……………!」

ボチャン。そしてドップラー効果の実験に最適そうな悲鳴。流石の窓付きも目を丸くした。

「……………おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか? なら俺も別バージョンで是非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

十六夜と店員。二人は割とマジだった。

「これ、誰が收拾つけるんだろ……」

* * * * *

「うう……まさか私まで濡れる事になるなんて」

「因果応報………かな」

「にやあ」

悲しげに服を絞る黒ウサギを見て、窓付きは小さく呟く。

「——『☆カンテラ☆』」

すると、窓付きの手にカンテラが現れる。

「黒ウサギ、こっちによつて？少しは乾くの早くなると思うし」

「あ、ありがとうございますですよ窓付きさん……」

涙目になりながら黒ウサギは窓付きに近寄り、暖を取る。それを白夜は興味深そうに見ていた。

「ほう？お主随分と面白ギフトそうな恩恵を持つとるのじやな。どれ、儂にも暖を——」

「燃えろ」

窓付きの一言でカンテラの中で燃え盛っていた炎は、近付いてきた白夜又に向かつて急激に大きくなる。

「危なっ!？」

「黒ウサギは巻き込まれた、でも白夜又さんは自業自得。近寄っていない理由は一つもない」

「お主結構酷いのう!」

——窓付きは、警戒していた。鳥人間でも、ポニ子でも無い、絶対に勝てない存在に。

「——ふむ、まあ良い。話があるなら店内で聞こう」

「よろしいのですか？彼らは旗も持たない”ノーネーム”のはず。規定では」

「”ノーネーム”だと分かっているながら名を尋ねる、性悪店員に対する詫びだ。——それに、興味深い者もいるしの……」

白夜又はじつ、と窓付きを見据える。暫く見た後、スツと目をそらして何事も無かったかのように話を続ける。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

——漸く、当初の目的が達成できそうである。

* * * * *

その後、外門の話を受けたたり、耀が驚獅子グリフオンの試練を受けたりして、漸くギフトの鑑定をして貰える事になった。

「——おんしらは自分のギフトの力をどの程度に把握している？」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「うおおおい？いやまあ、仮にも対戦相手だったものにギフトを教えるのが怖いのは分かるが、それじゃ話が進まんだろうに」

「別に鑑定なんていらねえよ。人に値札貼られるのは趣味じゃない」

ハッキリと拒絶するような声音の十六夜と、同意するように頷く二人。窓付きは一度溜息をついて、三人に顔を向ける。

「駄目だよ十六夜。今はあくまで、黒ウサギと白夜又の好意に甘えさせてもらって、鑑定をしてもらう事になっているんだから。一方的に頼んで一方的に断るといふのはいくらなんでもマナーがなってない」

「俺達は最初から頼んでない」
「それでも、だよ。そもそも三人は互いの恩恵ギフトを知らないでどうやって仲間として暮らすつもりだったの？」

むっ、と黙り込む十六夜。他の二人も難しい顔をして黙ってしまった。それを確認した私は、白夜又に顔を向けて口を開く。

「こちらの方で話は付きましたので、すみませんが白夜又さん。鑑定をお願いしますね」

「うむ……む、そうだ」

困ったように頭を傾けていた白夜又は、突如妙案が浮かんだとばかりにニヤリと笑った。

「何にせよ、主催者ホストとして、星霊のはしくれとして、試練をクリアしたおんしらには、恩恵ギフトを与えねばならん。ちよいと贅沢な代物だ

が、コミュニティ復行の前祝いとしては丁度良かろう」

白夜叉が柏手を打つと、私達の眼前に光り輝く4枚のカードが現れた。カードにはそれぞれの名前と、おそらくそれぞれの持つギフトを表す名前ネームが記されていた。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜

ギフトネーム” 正体不明”

ワインレッドのカードに久遠飛鳥

ギフトネーム” 威光”

パールエメラルドのカードに春日部耀

ギフトネーム” 生命の目録” ” ノーフォーマー”

マゼンタのカードに窓付き

ギフトネーム” 夢の器” ” 窓付” ” 彷徨”

” 錆付” ” 嘘吐” ” 彩／藍音”

それぞれの名とギフトが記されたカードを受け取る。黒ウサギは驚いたような、興奮したような顔で四人のカードを覗きこんだ。

「ギフトカード！」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「ああ、『恩恵』を記す『札』で『ギフトカード』……まんまだね」

「お三方は違います！というかなんでお三方はそんなに息が合っているのです!?!このギフトカードは顕現しているギフトを収納できる超高価なカードですよ！耀さんの” 生命の目録” だって収納可能で、それも好きな時に顕現できるのですよ！」

「つまり素敵アイテムってことでオツケーか？」

「だからなんで適当に聞き流すんですか！あーもうそうです、超素敵アイテムなんです！」

黒ウサギに叱られながら三人はそれぞれのカードを物珍しそうにみつめる。私も自分のカードに視線を落とし………すぐに見るのをやめた。

「そのギフトカードは、正式名称を” ラプラスの紙片”、即ち全知の一

端だ。そこに刻まれるギフトカードとはおんしらの魂と繋がった”
恩恵”^{ギフト}の名称。鑑定は出来ずともそれを見れば大体のギフトの正体
が分かるというもの」

成程、私のギフトは——私と、その娘達のギフトは、確かにギフ
トカードに刻まれている。ギフトの名称は私や娘達の名前になつて
いるらしい。

「で、窓付きのギフトはどうなってるんだ？お前のエフェクトが全部
記されるなら幾つになるかは分からないが、結構な数になると思うん
だが……」

「む？その娘はそんなにエフェクトを持つておるのか？」

「結構な数持つている事を仄めかしていたぜ。少なくとも今までで5
つのエフェクトを使用している」

「あ、ある程度纏められているから大丈夫だよ」

そうなのが見せろ、と言って十六夜は私からギフトカードを取る。
それを見て、疑問符を浮かべていた。

「なんだこりや、名前からじゃ効果がまるでわからねえぞ」

「私や娘達の名前がギフトとして載ってるみたいだからね。仕方が無
いと言えば仕方が無いかな」

「む？ふむふむ……この”夢の器”^{ゆめにつき}というのは他と毛色が違うよう
じゃが？」

白夜叉が覗きこみ、問い掛けてくる。

「多分だけど——私の現在の身体の事を指してるんだと思う。私の
今の体って、肉体じゃないの」

「——はっ。」

「この身体は私の夢の中の身体。私の全盛期の時の身体。私のギフト
の本質、かな？」

「……お前の身体は、実体じゃない、^{エクトプラズム}靈的物質に近い物だつてことか
？」

「大体あつてると思う」

「思うって、随分と曖昧だな」

十六夜の突っ込みに私は苦笑いするしかない。何せ——

「この身体を用意したのは、私じゃなくて先生だから……」
「先生って誰だ？」

「あっ……」

そういえば、説明してなかったな。

5. 夢賚之良（むらいのりょう）

「私の夢は、一つの異空間なんだったんだよ」

思い直せば私は自身の事、自身のギフトの事について、全く説明をしていなかったなので、皆に説明をする事にした。

「私が子供の頃に見た夢、それが私の恩恵の本質たる物だね。そして私の夢の中で探索をして手に入れたのが、『エフェクト』。エフェクトにはそれぞれ効果がある」

私は『★△ずきん★』を使うと、幽霊が頭に付けているような三角頭巾が私の頭に付いた。

「私のエフェクトの一つ、『★△ずきん★』を例に挙げて説明するね」
私が念じると、自身の身体がぼやける様に薄くなった。

「見ての通り、使用すると私の身体が半透明になるの。このエフェクトをつかっていると敵性存在に追跡されなくなるんだ」

「敵性存在？お前の夢には敵キャラまでいるのか？」
「うん。捕まったら最後、脱出不可能な空間へ閉じ込められるから私や娘達は『幽閉キャラ』なんて言っていたりもしたね。」

私の場合は鳥人間であったが、娘の一人である『うろつき』は黒い女性だったらしい。私は『★△ずきん★』を解除し、卵状の物質として実体化させる。

「あと、エフェクトはこうやって物質として出現させる事もできるね。娘達のエフェクトはこの状態で貰ったから、この状態なら人への譲渡が可能なんだと思う」

「恩恵の譲渡が簡単に可能とは……」

私はエフェクトを戻し、言葉が続ける。

「ただ、エフェクトの全てに意味があるわけじゃないの。姿が変わるだけだったり、特に意味の無い効果だったり、そういうエフェクトも多数存在するね」

「成程のう……」

「で、私の夢の世界には敵性存在以外の存在も居る。私が大人になつてから夢の世界で会ったら自我がより明確になった状態で会うこと

「ができたんだ」

ただ、私も本名は知らない。多分本名なんて無いのだろう。だから私はあだ名のような物で呼ぶようにしていた。モノ子、モノ江、ポニ子、マフラー子、かまくら子――

「そして、先生っていうのはその中の一人。何となく先生って感じがしたから先生」

「そうか……」

「何でかは知らないけど、他の皆からは『センチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生』なんで呼ばれていた時期もあったね」

「まるで意味がわからねえぞ?!」

十六夜の突っ込む気持ちはわかるが、私も分からないのだから仕方が無いだろう。

「で、私が寿命で死んだ時に先生が私の今の体と娘達のエフェクトをくれて、あとは皆が知ってる通り黒ウサギに召喚されたの」

* * * * *

説明し終えて暫く静寂が流れると、始めに白夜叉が話を切り出してくる。

「おんしの恩恵はわかった。しかし……その先生とやらは何か優秀な魔術師だった、とかではないのか?」

「うーん……元々が夢の中の人物だし、偶に蘊蓄とか言える程度の知識はあるけど、魔術師ではないと思う」

「しかしその身体は素晴らしい完成度……ううむ、謎に包まれておるな」

「でも、漸く窓付きさんに娘がいる、って事に納得がいったわ」

うんうんと頷く飛鳥に、耀も同じ様にして同意する。

「で、結局窓付きのエフェクトの数が分からないんだが?」

十六夜の言葉に黒ウサギも白夜叉も、全員が口を閉ざす。そしてその目は口よりも雄弁に語っていた。即ち、『気になる』と。

「えっと……結構な数だから、数えるのに時間かかるし、今は遠慮したいんだけど……」

「チツ」

「……さつき舌打ちした？」

「気のせいだろ」

十六夜はあからさまに目を逸らして、口笛を吹く。どうやらこの少年は誤魔化すつもりなんて殆んど無いらしい。私は溜め息をついて、話を变えることにした。

「ところで十六夜のギフトって何なの？」

「ん？ああ、そういえば窓付きが余りにも面白——ん——ん——っ、衝撃的だったもんだから忘れかけてたな。これってレアケースなのか？」

そう言つて十六夜はギフトカードを白夜叉に見せると、白夜叉の表情が劇的なまでに変化した。

「……いや、そんな馬鹿な」

尋常ならざる雰囲気、白夜叉はすぐさまギフトカードを取り上げた。真剣な眼差しでギフトカードを見る白夜叉のそれは、まさしく有り得ない物を見たかのような……？

”コード・アンクワン 正体不明”だと……？ いやありえん、全知である”ラプラスの紙片”がエラーを起こすはずなど」

「何にせよ、鑑定は出来なかつたってことだろ。俺的にはこの方がありがたいさ」

パシッと十六夜はギフトカードを白夜叉から取り上げる。白夜叉が納得できないように怪訝な瞳で十六夜を睨んでいるが、世の中不可解な事で溢れていると知ってる私からすると、余り気にしない方が良いと思うのだけだ。

私達が暖簾の下げられた店前に移動すると、私と耀、そして黒ウサギは一礼した。

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦するときは対等の条件で挑むのだもの」

「ああ。吐いた唾を飲み込むなんて、格好付かねえからな。次は渾身の舞台上で挑むぜ」

「私も十六夜達ほど好戦的にはなれないけど……私なりに、全力を尽くすつもりだよ」

「ふふ、よかろう。楽しみにしておけ。……ところで」

白夜叉はスツと真剣な面立ちとなり、私達の方を見る。

「今さらだが、一つだけ聞かせてくれ。おんしらは自分達のコミュニティがどういう状況にあるか、よく理解しているか？」

「ああ、名前とか旗の話か？ それなら聞いたぜ」

「ならそれを取り戻すために、“魔王”と戦わねばならんことも？」

「聞いてるわよ」

「……。では、おんしらは全てを承知の上で黒ウサギのコミュニティに加入するのだな？」

チラリと横目で黒ウサギを見ると、ドキリとした顔で視線をそらしている。きつとコミュニティの現状を秘密にしようとしてたことに、後ろめたさを感じてるのだろう。

「そうよ。打倒魔王なんてカッコいいじゃない」

「“カッコいい”で済む話ではないのだがの……。全く、若さゆえのものなのか。無謀というか、勇敢というか。まあ、魔王がどういものかはコミュニティに帰ればわかるだろ。それでも魔王と戦う事を望むというなら止めんが……。その娘二人。おんしらは確実に死ぬぞ」

その白夜叉の言葉には予言のような確信が込められていた。そして……。私もその言葉に賛同するほどに、彼女達はまだ弱かった。

「魔王の前に様々なギフトゲームに挑んで力を付けろ。小僧と窓付きならばまだ良いが、おんしら二人の力では魔王のゲームを生き残れん。嵐に巻き込まれた虫が無様に死ぬ様は、いつ見ても悲しいものだ」

「……白夜叉。私も概ね同意だけど、少しだけ言葉が厳しいよ？ 例え貴女が太陽ヒトナラザルモノと白夜の星霊であっても、人の価値観が理解できるなら少しは言葉を選ぶべきだね」

少しだけ怒ったように私が言うと、白夜叉は少しばかり考えこみ、飛鳥達に頭を下げた。

「窓付きの言う通りではあるな。小娘、悪かった」

「い、いえ……。それは余り気にしてないわ」

「白夜叉も窓付きも、私達を貶める為に言ってるんじゃないわ、きちん

と先を案じて言ってくれてるのは分かるから……」

私は少しだけ驚く。二人はまだ若く、そして……恩恵の影響なのか、その年を考慮しても精神的に未成熟おさないと言える。いや、それを彼女達自身、理解してるのかもしれない。

「まあ、白夜又さんの忠告は肝に銘じておくわ。次は貴女の本気のゲームに挑みに行くから、覚悟しておきなさい」

「ふふ、望むところだ。私は三三四五外門に本拠を構えておる。いつでも遊びに来て。……ただし、黒ウサギをチップに賭けてもらうがの」

「嫌です！」

即答で返す黒ウサギと拗ねたような素振りを見せる白夜又が問答を繰り返す様を見ると、まるで姉妹のような仲つむまじさを感じる。きつと、彼女達も彼女達なりに十六夜達の行く末を考えてくれているのだろう。

私達は店を出ると無愛想な女性店員に見送られて”サウザンドアイズ” 二一〇五三八〇外門支店を後にした。